

雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他整備工事に伴う立会調査

雲部陵墓参考地は、兵庫県篠山市東本荘字城山の坪に所在する、現状で墳丘長約140mを測る前方後円墳である。本陵墓参考地の墳丘裾、外堤内法裾が、経年による波浪によって浸食と崩壊が進んだため保護工事が計画され、そのための事前調査を平成16年度に実施し、その成果は本誌第57号に報告したところである。

平成17年度には前述の護岸工事の実施と併せて、前方部、及び後円部にある渡土堤の改修工事が実施された(第39図)。よって、掘削の伴う工事期間中の平成17年11月28日から12月2日までの5日間と、平成18年3月10日から15日までのあいだ立会調査を実施した。以下、その立会結果について報告する。

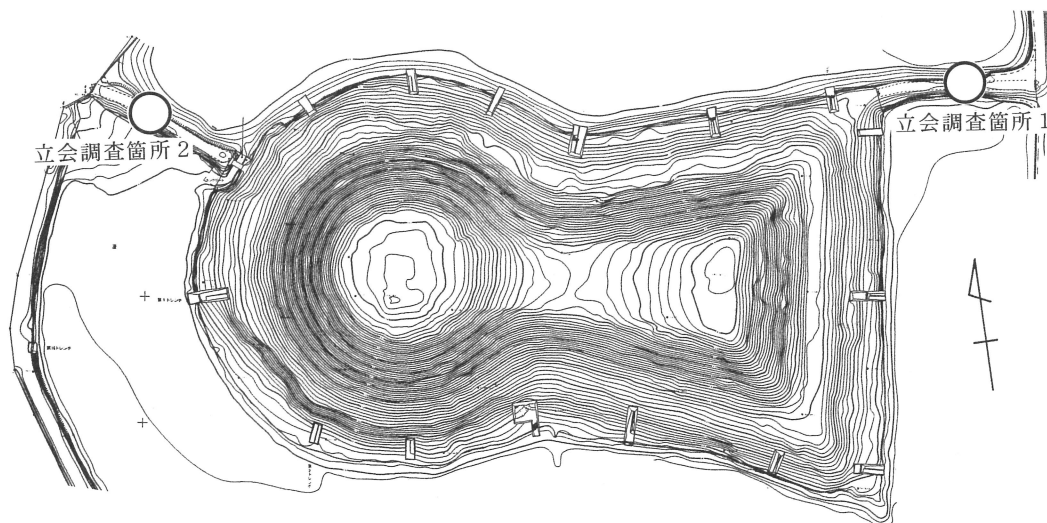
前方部渡土堤工事箇所 前方部の渡土堤は前方部北端にとりついており、今回の整備工事では両側面の護岸工事(石積み工法)と、通水管の設置工事が実施された。通水管の設置箇所では渡土堤を、長さ約3.4m、幅約1.1m、深さ(最深)1.3mにわたって横断するように掘削した。この部分の土層断面図を第40図1に示した。

この土層図でも明らかなように、渡土堤の大半はⅡ層とした拳大の礫を多く含む、締まりのない盛土によって構築されていることが分かる。すなわち現在の形に渡土堤が整備された経緯としては、明治30年代に南濠にも水を貯めることを目的とした整備工事がなされた際に実施されたと考えることが妥当であろう。その後昭和10年代にも改修されているようであるが、基本的な渡土堤の整備は明治年間の工事であると考えている。その下には、渡土堤が築かれるまでの表土、及び明治時代の盛土と考えられる土層(Ⅲ層)が観察された。また、北濠の水際では、事前調査の際にも検出された灰色の粘土層(Ⅳ層)が見られ、この土層は昨年度の調査結果から、北濠の漏水防止のために持ち込まれた粘土であると判断した。

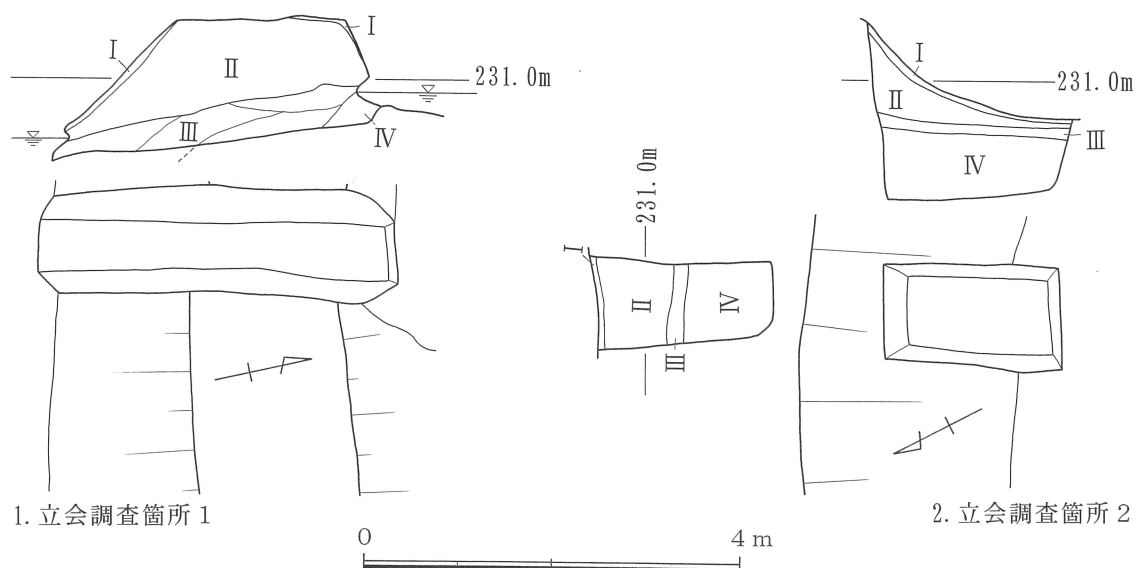
遺物としては、第Ⅲ層から土器の小片が、わずかに出土した。これも昨年度の調査時の所見から判断して、参考地が築かれる以前の遺物であると考えている。しかしながら図化できるような大きさの破片は出土していないため、詳細は不明である。

以上のように前方部渡土堤の工事においては、古墳時代に遡るような遺構はまったく検出されず、通水管設置工事、及び石積み護岸工事について予定通り施工した。

後円部渡土堤工事箇所 後円部の渡土堤は、中軸線からやや北に寄ったところに取り付いているが、この渡土堤についても両側を石積みによる護岸工事が計画された。この渡土堤についても昨年度の事前調査、及び前方部の状況から古墳時代に遡るものとは考えがたいので、南側に1箇所土層観察用のトレンチを設けて、その所見を得ることとした。



第39図 雲部陵墓参考地 調査箇所位置図 (1/1500)



第40図 雲部陵墓参考地 調査箇所平面図および断面図 (1/80)

その土層断面図は第40図2に示したとおりであるが、薄い表土(I層)の下に、茶褐色砂質土(II層)が認められた。この土層によって渡土堤が構築されているものであるが、土質はまったく締まりのないものであり、新しい盛土であることは明白であった。よって、当初の予想通りこの渡土堤も、明治期以降に築かれたものであると判断した。この層の下には黒色粘質土(III層)があり、この土層が明治期の表土であると判断した。その下の灰色小礫混じり土(IV層)は、均質な土であり、地山の可能性が高いと判断した。また、今回の調査箇所からは、新しい時期のものを含め一切遺物は出土しなかった。

以上の調査結果のように遺構・遺物は出土しなかったことから、工事は予定通り施工した。

その他工事箇所 今回の整備工事においては、樋門改修工事(3箇所)・外堤石積工事・堆積土浚渫工事が併せて実施された。これらすべての工事箇所においても、遺構・遺物は一切出土しなかったため、予定通り施工した。

また、墳塋裾護岸工事においても、掘削を伴わない工法を採用したので遺構、遺物は出土せず、予定通り施工した。

(徳田誠志)